

大友氏の歴代墳墓を巡る (八)

十三代親綱

古藤田 太

(会員・弥生町江良)

第十三代親綱

長祿三己卯天□二月初六日

大聖寺殿耀山光君大禪定門

菩提寺 犬飼町柴北禪宗大聖寺

大友氏の兩統迭立劇は感じ入る程の美挙であるように思うが、然し十一代親著が、親世系の持直に大友家督を譲ることとなるや、応永三十三年(一四二六)十一月、三角島みすみの乱が惹起した。

この乱の因って来るところが、中国の雄、大内氏が、豊前・筑前の守護で飽きたらず、対外貿易の基地博多を押さえてゆこうとする野望があったために発生したものとされる。ここに面白いことは、あの気性の激しい、

しかも籤で將軍になったといわれる六代義教にしても、博多の直接支配を考慮に入れて、大内氏の強大な兵力を利用し、幕府の出先機関九州探題を護衛させようとするものであったとすると、真に複雑な構図となるわけである。

この三角島の乱が、大内氏の九州侵出のために、大友氏代替りの初め、言わば持直政権の不安定の初期に、大友家督にありつけなかった不平分子に、大内氏が働きかけて手先きとした孝親や親綱を、持直抹殺劇に踊らしたようである。

この大内氏(盛見)の仕組んだ劇は破綻し敗退したが、次々に大友、大内の争覇は続き、永享元年(一四二九)六月二十八日、大内盛見は筑前萩原で、大友・少弐の連

合軍に破れ自刃した。

驚いたのは夢破れた幕府の義教で、一変して態度を硬直させ、盛見の子が幼少なので、兄義弘の子持世に大内氏の家督を継がせ、中国・四国の兵を増援軍としてつけることにした。その上、大友持直の守護職をとりあげ、戦死した孝親の弟、親綱に与えたばかりか、持直周辺に好餌をあたえて敵対するように仕向けた。

將軍義教は、こうして大友持直を裸にしておいて攻め立て、持直軍の弱体化を執拗なまでに画策してゆくのである。



親綱の墓

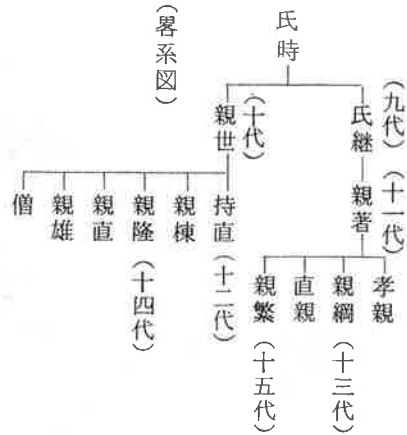
『満濟准后日記』によると、幕府は幕府がつくった豊後国の守護親綱に、田原氏や佐伯氏は応援することを求めている。この頃、佐伯・田原氏は奉公衆の有力メンバーに数えられていたかも知れない。サイキ・タワラの名が見えるのである。

以上のことは「大友持直」について述べた際の復習であるが、親綱・親隆・持直を論ずれば、同じようなケースになりかねない。分母を同じくした分子の差である。念のため畧系図も今一度掲げることとする。

大友持直にしてみれば、降って湧いたような事件である。大内氏との対決は私闘であって、幕府に敵対している訳ではない。幕府に対する忠誠にはかわりはないと巨額な金品をおくって心象を柔げようとしたが無駄であった。

やがて、幕府の声がかかりで持世の持直退治となり、また幕府によって豊後国の守護となった親綱と持直との戦が、姫嶽の大戦に発展していった。

持直は不利な立場にありながら鋒々たる顔ぶれで善戦した。親綱という人は全くと言っていい程史料の少ない人である。しかし当時の義教の足利幕府の勢威は大きく、



専横をゆるさざるを得ない時代であった。大内持世、大友親綱は幕府権力をバックの姫嶽戦であった。

常楽寺本大友系図によると、親綱は持直軍を攻め立てたが、利を失ない姫嶽下谷奥河内に退いて大石に腰を下ろして考えた。「この戦に勝利があるならば、この大石よ、砕け散れ」と親綱が祈ると、その大石が忽ち砕け散ったという。親綱は散りじりになった家来達を集めて持直軍に再び挑戦した。

永享七年（一四三五）六月二十九日、四国連合軍の総大将河野通久は姫嶽百貫楼に戦って戦死した。この報を

聞いた將軍義教は、通久の死を賞し、通久の子、大正丸に臼杵荘を与えたが、この地は親綱の要請で親綱に返えされたと記されている。

姫嶽の麓は東神野で、ここが、「八戸とや河野は世界の内か」といわれる程深い谷と、奥山の辺鄙な所である。

親綱軍は四国、中国の連合軍と共に、地理に明るい持直軍のゲリラ戦法に悩まされながら戦った。親綱は数えたので姫嶽の包囲戦でのぞんだが、何等功を挙げることは無かった。持直は海部水軍を味方につけていた。持直という人は偉大であったばかりでなく、接する人を心服させるに足る高い徳を持った人であったと思う。この人は大友氏初の海外貿易を手掛けた程、強力な水軍が背後にあったようである。この持直水軍は姫嶽の尾根根に食糧その他の物資を補給し続けた。

こうして幕府勢力を敵に廻して、戦斗には屈しなかった持直も、味方の志賀・田北（親増）・薬師寺・御手洗等が親綱側に寝返ったために、永享八年六月十一日遂に落城して持直は行方をくらました。その後、第二次姫嶽戦が展開されたが、長く抗戦はできなかった。然し持直の幕府勢力に対する抵抗は文安二年（一四四五）の終生

まで続けられた。

永享十一年頃親綱は家督を親隆に譲って隠居した。戦乱の中に生きた武將と云うよりは、一族の血の間（狭間）に生きた人として、諸々の情感に苦しみ続けた半生であった。晩年の平安を願って柴北村（現在犬飼町）の柴北川の畔に隠居した。敵側に廻った父、親著の供養の為にか、多くの一族や輩下のためか、以来、深く仏教に帰依した。

近くに、南北朝時代に不肯正受禅師の開山と伝えらるゝ大聖寺があった。この無量仏（阿弥陀如来）を篤く



大聖寺山門

信奉したという。

現在、大聖寺に親綱ゆかりの無量仏が伝えられている。親綱が隠栖された市という部落に五反畑の二枚続きが殿屋敷として残っている由である。数十名の家来に護られて静かにここ柴北の地に余生をおくった。大友氏第十三代親綱の波乱の生涯が終ったのは長祿三年（一四五九）二月六日であった。

次号原稿×切

十二月三十一日

